

氏名	須崎文代			
学位の種類	博士(工学)			
学位記番号	博甲第189号			
学位授与の日付	2014年3月31日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
学位論文の題目	明治・大正・昭和初期の検定済高等女学校用家事教科書にみる 日本の台所の近代化に関する研究			
論文審査委員	主査	神奈川大学	教授	内田青蔵
	副査	神奈川大学	教授	重村力
	副査	神奈川大学	教授	曾我部昌史
	副査	神奈川大学	教授	山家京子
	副査	関東学院大学	教授	水沼淑子
	副査	文化学園大学	准教授	安野彰

【論文内容の要旨】

本研究は、これまで住宅史研究において着目されながらも、具体的な動向が不明であった、わが国戦前期の住宅用台所の近代化について明らかにしたものである。特に、戦前期の住宅改良を求める動きは、建築分野のみならず家政学の分野でも積極的に議論された。そこで、本研究では、当時の台所に関する考え方が継続的に記述された家事教科書を主史料とし、文部省発行『検定済教科用図書表』所載の全129冊のうち、全国から103冊を収集した。そして、これらの史料から読み取れる台所に関する理論や台所空間・調理設備の形態的变化を分析し、住宅用台所の近代化過程における変遷の動向を明らかにしている。

本論文の構成とその内容は以下の通りである。

第1章では、研究史料としての検定済高等女学校用家事教科書における台所関連記述の概要を把握し、教科書における台所の位置づけについて検討を行っている。そこから、戦前期の台所論では、新しい作業形式である「立働式」の導入、および「衛生」と「利便」という理念が骨子となって展開されていたことを明らかにしている。それを受けて、第2章から第4章では、これら三つの点について、理念の展開とそれに伴う形態の変化に着目し、台所の変遷過程を明らかにしている。

第2章では「立働式」の導入過程とそれに伴う調理設備の高さの変化を明らかにしている。「立働式」という台所における新しい作業形式の導入は、既往の近代住宅史研究においてもその重要性が着目されながら、具体的な動向が明らかにされてこなかった課題であり、本研究では戦前期に展開される台所改良の前提条件として扱われ、台所空間や設備の形態の変化に直接影響を与えた重要な動向と位置づけられている。本研究の分析の結果、明治42年に初めて「立働式」に関する記述が見られたものの、この段階では概念的で具体性に乏しい扱いであり、台所改良の主要なテーマとしての象徴的位置づけに止まっていた。その後、大正末以降における能率論の導入が重要な転機と

なり、昭和初期には流し台・調理台・火器台などの作業面の高さ寸法や設備相互で作業面の高さを一致させる工夫など、具体的な形態の改変へと急速かつ多様な展開が見られる様子を明らかにしている。

第3章では、[衛生]に着目し、関連する記述の動向から、当時の[衛生]についての考え方や扱われた項目について検討し、さらに[衛生]に纏わる形態的变化として、採光・通風のための方策と床・壁・天井および流し周り・火器周りの材料の変化を検討し、その動向を明らかにしている。

その結果、明治30年代以降から採光、換気、位置等の[衛生]に関する記述が見られ始め、明治末以降には耐水耐火や食品保存の方法などと扱う内容の拡大化が見られること、これらの項目はその後戦前期を通して扱われ続けたものであったことを明らかにしている。

このうち、衛生面を改善するための具体的方策としては、まず採光・換気方法が着目され、明治末から大正期にかけては「天窗」「引窓」が普及し、昭和初期以降は外部に面した開口部からの採光・換気を基本に排気装置として回転窓、フード、排気筒等の局所換気を用いるという考え方が普及していたことを明らかにしている。

また、台所の位置・方位に関する動向は、明治中期から大正期にかけては、採光・換気等の[衛生]を主目的とした位置のあり方が示され、大正末頃から昭和初期には採光、換気の方法やその必要性についての考えが浸透するなかで、南東南・東向を基本とした具体的な方位に関する記述に変化し、また、採光は北・北東向を適切と捉える記述が散見される傾向が見られることを明らかにしている。

台所の床・壁・天井および流し周り・火器周りの仕上げ材料に関する考え方は、総じて清潔さや掃除の便、耐水・耐火といった衛生面の向上を主眼として展開され、特に、昭和初期にはタイル、人造石、コンクリート等の新材料の普及が図られていたことを明らかにしている。

第4章では、改変のもう一つの主題である[利便]に着目し、[利便]という概念の捉えられ方の変化や、[利便]に関わる台所設備の形態や平面計画の変化として、台所と隣接室との配置関係、台所の広さおよび土間の変遷、台所設備の集約化・一体化の過程を明らかにしている。

すなわち、[利便]に関する記述内容は、明治中期から後期の段階では、整頓・収納や他室との位置関係に限られ、明治末以降になって立働式の導入や台所の広さ等が扱われ始め、大正中期から昭和初期には労働軽減のための設備配置や平面計画に関する考え方が展開された動向を明らかにしている。

隣接室との配置関係は、明治期から大正期は、玄関や座敷との非近接性が主張され、住まいにおける接客本位を重視する考え方が影響していた段階と考えられた。その後、大正中頃を境として、配膳行為の合理化を目的として茶の間・食事室との隣接性を重視するよう変化すること、これは当時主張されていた住宅改良における家族本位への転換の影響が考えられることを明らかにしている。一方、家事教科書所載の住宅平面図をもとに分析した結果、浴室を隣接配置する平面形式は明治中期の図面から見られ、大正期以降の水周りの集約化の影響が見られる一方で、前近代の台所でも湯（熱源と水）を必要とする空間として、台所と浴室を隣接または近接配置する考え方が慣習的に存在していたことを示し、また、「台所－茶の間・食事室」、「台所－浴室」という隣接形式の図式は、戦後に議論されるLD-Kの関係性や、コアシステムのような水周りの集約化におけるキッチンバス・トイレの関係性を示唆するものとも捉えられることを明らかにしている。

台所の広さについては、大正後期から利便性を意識した設備配置が主張され、土間作業を廃して床上作業へと統一する考え方が展開され、無駄な広さを廃してよりコンパクトに計画し、土間を縮

小して勝手口、あるいは浴室の焚口と兼用するよう変化したことを明らかにしている。

また、台所設備の集約化・一体化については、大正中期に諸設備の集約配置に関する記述が見られ始め、大正末期から昭和初期には掲載図版の分析を通して諸設備の一体化傾向が継続的に見られることを明らかにしている。この諸設備の集約化は、具体的には主要な設備を一行に並べるI型の配列型として提示され、平面形式としては外壁面にI型の集約配置をとる型に収斂していくことを明らかにしている。また、こうした配列型や平面形式は、戦後も定着し続けた型であり、戦前期にはほぼ完成された形式のものであったことを指摘している。

最後に、第5章では、各章で明らかにした動向を総合して、日本の台所近代化の史的特質を明らかにしている。

すなわち、家事教科書に見られる日本における台所の近代化の動向として、最初に、明治期から大正初期にかけて採光、通風や排水などの室内環境衛生や食品衛生等の「衛生」に比重が置かれて進められた背景として、日本の気候風土をもとにした独自の台所の模索過程と捉えられることを指摘している。また、「利便」については、大正中期頃から、慣習的な「便利さ」とは明らかに異なるより高度な水準の合理性を主眼とした考え方が展開され、台所論は「利便」に比重を置いて論じられるものへと変化し、とりわけ合理的・科学的な考え方の反映として能率論が展開されたことにより、台所形態が大きく変化したと考えられることを指摘している。「立働式」についても、その導入による台所形態の近代化過程は日本独自のものであり、「立働式」は家庭生活における洋風化の象徴であった一方で、台所が裏方の労働空間であったが故に能率性が偏重され、建築や住宅の近代化過程に見られるような洋風意匠の導入は重視されなかったことを指摘している。

また、台所の近代化過程に関しては、衛生、利便という現実的かつ技術的な側面に眼目が置かれ、「洋風化」は立働式や先進的技術の導入に表徴されていたものの、意匠のレベルでは殆ど扱われず、能率論を中心とした合理化・科学化の模索が他の諸室に比べて飛躍的に進展したことが指摘されている。さらに、台所の形態的变化に見られた(i) 台所一茶の間・食事室、台所一浴室という隣接形式、(ii) 土間から床上への作業場所の統一、(iii) 諸設備の一体化、(iv) 外壁面へのI型配置という平面形式への収斂は、日本の気候風土からくる独自の衛生観や住宅の狭小性などを背景としながら、世界的に見ても極めて完成度の高い型を形成していたことを明らかにしている。そして、戦前期の日本において完成した上記の台所形態は、戦後に普及した台所形態の素地を形成していたことを指摘している。

そして最後に、こうした台所の変遷の動向を総合すれば、明治中期から後期を、台所のあり方として「衛生」や「利便」に関する考え方が扱われ始めた「萌芽期」、明治末期から大正中期を、扱われる項目の多様化や具体的な改良の方策が展開された「模索期」、そして、大正後期から昭和初期を、具体的な改良方策の普及や一定の台所形態への収斂が見られた「発展期」とし、この三段階に時代区分することができることを提案している。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、「明治・大正・昭和初期の検定済高等女学校用家事教科書にみる日本の台所の近代化に関する研究」と題し、明治以降の欧米化・近代化におけるわが国の住宅の台所の変容過程を明らかにしたものである。史料は、これまでほとんど注目されてこなかった戦前期に刊行された検定済高等女学校用家事教科書を用いるなど、極めて意欲的な研究といえる。分析方法は、記述内容を整

理・分類し、通時的变化を解明するもので、方法論としては極めてオーソドックスなものではあるものの、その整理・分類の内容は極めて精緻で、こうした整理・分類を通し、主要な分析概念として「立動式」および「衛生」「利便」を突き止め、順次、分析を行っている点は極めてオリジナリティのある分析といえる。

こうした分析の結果得られた結論は、例えば、台所の近代化過程は、衛生、利便という現実的かつ技術的な側面に眼目が置かれ、「洋風化」は立動式や先進的技術の導入に表徴されていたものの、意匠のレベルでは殆ど扱われず、能率論を中心とした合理化・科学化の模索が他の諸室に比べて飛躍的に進展したことの指摘は、これまでの台所研究では見ることのなかった知見であり、わが国の台所の近代化の具体的内容を明確に捉えたものとして評価できる。

また、最終的提案としての、3期の時代区分、すなわち、明治中期から後期を《萌芽期》、明治末期から大正中期を《模索期》、そして、大正後期から昭和初期を《発展期》とする提案は、今後のわが国の台所研究の指標としてのみならず、わが国近代住宅の変遷過程を捉える場合とともに、隣接学問領域である家政学や生活学領域においても、極めて有効な指標といえるであろう。

以上、本研究は、史料の斬新性と独自性、分析方法の独自性に加え、結論もわが国の近代化を考える際の重要な指標を提示しており、また、今後の研究の発展が大いに期待されるものでもある。このため本論文は、学位論文としての価値を十分認めることができるものといえる。

(主査：内田青蔵)